

さばえ近松文学賞2018 ～恋話 (KOIBANA) ～

受賞作品集

受賞作品

◆近松賞 (賞金10万円、賞状、副賞)

「糸」

石井 泰子

東京都大田区

◆優秀賞 (賞金3万円、賞状、副賞)

「絹肌の男」

朝川 圭子

福井県越前市

◆佳作 (賞金1万円、賞状、副賞)

「彼女の言うとおわり」
「脳内フィアンセ」
「私の命」

山本 築
西岡 晃子
南 理維

福岡県福岡市
東京都町田市
大阪府大阪市

◆松平昌親賞 学生部門（図書券 1万円、賞状、副賞 ちかもんくングッズ）

「初恋は雨空の下」

香高 百柚

北海道札幌市



特別審査員
(福井県出身)

鯖江が支える京都の葵祭

二葉葵（フタバアオイ）を思い浮かべることができますか。

一本の茎に丸っこいハート形の葉が二枚あって、葉っぱ一面には元気いっぱいの葉脈が特徴です。

京都の「葵祭」の象徴ですが、環境問題で激減し、祭の開催も危ぶまれたことがありました。それを支えているのが、二葉葵を上賀茂神社に奉納する鯖江の人たちです。

今回の作品は、今の鯖江を切り取る良いテーマでした。

過去に生きた人々が祭に込めた思いは今、伝統として私たちの前にあり、今を生きる人たちが過去と現在、未来へとつないでいく。

石井さんは前回も応募された方ですが、恋の面では主人公の年齢にそぐわない時代感覚を感じます。その辺も含めて、いろんな年代の方に読んでいただきたいです。

伝えたいことを絞り込んで

作品は「何を伝えようとしているのか」「おもしろいか」の視点から審査した。

さらに、審査の観点として「焦点化されているか」「人物像の描き方」「文章構成」「作品としての整合性」などの観点から総合的に判断した。原稿用紙十枚内の短編作品である。

伝えたいことを絞り込んで表現している作品の方が、より強い印象を与えていた。

また、説得力がある文章も多く、作品世界に入り込むことができて楽しかった。

目次から

受賞作品

講評・特別審査員 桂 美人

総評・審査員長 林 哲治

「糸」

石井 泰子

「絹肌の男」

朝川 圭子

「彼女の言うとおり」

山本 築

「脳内フィアンセ」

南 理維

「私の命」

西岡 晃子

「初恋は雨空の下」

香高 百袖

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲などの編集は加えておりません。

陽奈子ひなこは葵祭の行列を感慨深い眼差しで見つめている。艶やかな王朝絵巻も然る事ながら、神事関係者や来賓の胸元、牛車、御簾、冠、装束の至る所に装飾用として付けられている植物の飾り物について目が行き、誇らしい気分がこみ上げてくるのである。

その飾り物は『葵あおい桂かづら』と云い、二葉葵と桂の若葉の小枝を絡み合わせたものである。二葉葵は葵祭の名前の由来ともなっているハート形の美しい植物であり、上賀茂神社、下鴨神社の神文にもなっている。

「ああ…… 鯖江の両親や町内の有志が大切に育てて奉納した九千八百本の二葉葵がこうして使われているんだわ。これが本当の縁の下の力持ちだわ」

陽奈子は行列が通り過ぎるのを見送りながら父に教えて貰った、鯖江市から上賀茂神社に二葉葵が奉納されるようになったいきさつを思い出した。

もともと葵祭で使用される二葉葵は、地元の京都で採取されていたが、十年このかた、地球温暖化と鹿の食害で激減して祭の開催が危ぶまれるほどになってしまった。

そこで、その昔、徳川家康のひ孫である松平昌親が藩主を務めた吉江藩があった鯖江市の有志が立ち上がり、借り受けた二葉葵を株分けに株分けを重ねて一回の祭で一万余本も使う二葉葵

の大半を奉納できるまでに増やしたと父は胸を張っていた。因みに吉江藩の家紋も葵だと付け加えるのも忘れなかった。

小さくなつた行列を眺めながら、今日の祭のために忙殺されているに違いない寿之としゆきのすらりとした姿を想像しながら、初めて彼に出会つた一年前のことを思い出して、ほつと口元をゆるめた。

その時、鯖江の町は夕暮れに包まれようとしていた。

陽奈子は、太陽光発電施設であるソーラーパネルの架台の下に小さく屈みこんで二葉葵に見入っていた。二葉葵は別名ヒカゲグサといわれているほどに直射日光が苦手な、繊細で気難しい植物だが、ソーラーパネルの下の日陰では青々と繁っていた。

自分が今、試行錯誤していることに心を奪われていたため、ポンと肩を叩かれるまで後ろに父親が立っていることも、父親に若い男の連れがいることにも気付かなかつた。

「陽奈子、ここに居たのか。京都の上賀茂神社の葵祭の担当の方が二葉葵の様子を見にいらしたよ。ここに来る前に奉納用の畑をご案内したら、こつちも見たいとおっしゃるからお連れしたんだよ」

驚いて立ち上がった陽奈子に男は深々と頭を下げた。長身を持って余しているような、やや猫背気味の上半身を起こして「渡辺寿之と申します。お父さまには大変お世話になっておりま

す」と見た感じとは裏腹な、どっしりしたバリトンで名乗った。

自分と同じ年くらいかな？ いや、ひとつふたつ上かな？ と値踏みしつつも、背中を丸めて屈みこんだ無防備な後ろ姿を見られたきまり悪さで気の利いた返事もできず、ぶすつとした表情をした自分に内心で腹を立てながら俯いて突っ立っていた。

寿之は陽奈子の戸惑いにはお構いなしで父親の顔を見ながら話し出した。

「こちらもいい具合に育っていますね。これなら五月十五日の葵祭には欠かすことのできない二葉葵は安泰です。僕がこの仕事に就いた頃は本当に激減してしまつて、綱渡り状態でした。

でも神社とゆかりの深い鯖江のみなさんがご苦労して奉納して下さるようになったお蔭で、安心して祭の準備にかかることができます。ありがたいことです」

ここまで言った後、急に陽奈子に顔を向けて、父親と話した四角張った物言いからちよつと砕けた口調で問いかけて来た。

「熱心に二葉葵を見てたけど、何か関係のある仕事をしてるんですか？」

陽奈子が口を開きかけた時、父親が割って入った。

「立ち話も何ですから、良かったら家にお寄りになりませんか？ 鯖江は水が良いから美味しい地酒があるんですよ。この娘も結構いける口ですから」

と言いながら、どんどん先に立って歩き出した。「全くもう。いつも独善的で一言多いんだから」と心の中で舌打ちしつつも、自分一人が居残る理由もなく黙って歩き出した。

寿之は父親の誘いを断らなかつただけあつて酒が強かつた。もともと客寄せが好きな質の父親と差しつ差されつして、結局は北陸本線の特急列車サンダーバードの最終で京都に帰つて行つた。陽奈子が鯖江駅まで車で送つたが降り際に寿之は名刺を出しながら言つた。

「今日は僕を送るためにお酒、我慢してくれてすみません。今度の葵祭、見に行らっしゃいませんか？ もつとも、その日は僕は祭の当事者だからお構いはできないんですけど……」

陽奈子は行くとも行かないとも答えず、曖昧にお辞儀をして車を発進させた。

陽奈子は東京の短大の染織コースを卒業した後、大手テキスタイルの企業に就職して五年間勤めた。だがその五年間に楽しい思い出はひとつもなかつた。同期のポジション争いに疲弊して自分の特色も出せず、同棲した頼りない男にも裏切られ、ずたずたに傷付いて郷里の鯖江に戻つたのが二年前であつた。

東京の生活も恋愛も懲り懲りだつたし、何よりも臆病になつて来た。

鬱鬱として楽しまぬ日を送つていた陽奈子に父親が就職の情報を持つて来た。

自分が知っている太陽光発電施設の施工会社が、ソーラーパネルの下のじめじめした土地を有効活用して日陰を好む二葉葵を栽培し、それを材料にして草木染のブランドを作るプロジェクトを立ち上げたため、染織の知識のある人を探しているというのである。鯖江には石田縞という伝統の木綿織物があるため、そのノウハウを活かして新しい地場産業を開拓するのだとい

う。

現に陽奈子の家にも母が使っている小型に改良されて、使い勝手のいい織機がある。

陽奈子はこの話に一筋の光を感じた。東京の大手企業では小さな部品のひとつでしかなかったが、ここでは自分の個性が発揮できるかも知れない。石田縞は木綿が主流だが自分が係るとしたら、敢えて絹糸を使って挑戦してみたい。

採用された直後から、陽奈子は二葉葵の染めに没頭した。草木染は染料を糸に定着させるための媒染剤が命である。媒染剤によって同じ染料でも糸の発色は千変万化である。

鉄、銅、アルミニウム、チタン、錫、木灰、藁灰、石灰。ありとあらゆる媒染剤を試みた。

短大で学んだ知識がやと役立つ時が来た。

一年が過ぎたころ、陽奈子は鬱から抜け出して、心の中に密かな目的を持ち始めていた。

「学生のころ夢見たように自分の染めで、自分の図案で、自分の織りで、完全なオリジナル作品を作ってみよう」

そんな思いに駆られ出した時に寿之に出会ったのである。

結局、その年の葵祭に陽奈子が行かなかったが、その代りのように寿之が足繁く鯖江に来るようになり、いつの間にか陽奈子の臆病風も遠のき始めたころ、寿之が硬い表情で打明け話をした。

彼には離婚歴があった。学生結婚をしたが、お互いの就職が決まって働き出した途端に妻が

出て行った。仕事が面白くなってそちらに専念したいからというのが理由だった。

理屈に合わない話だが気持ちに他に向いている者への手立てもなく届けに判を押しした。寿之はこの話を相当の覚悟で話したが、陽奈子はさほど驚かなかった。

戸籍こそ汚れていないが、自分とて同じようなもの。お互いさまという気持ちだった。むしろ、早い時期に知らせてくれたことで、気持ちがぐっと寄り添うような気がした。

秋口の日、陽奈子が京都に向いて二人で森林公園を散歩していると、黄葉した桂の葉が敷き詰められている場所に出くわした。

踏みしめるとメープルシロップに似た甘い香が立ち昇った。

寿之はひととき大きい一枚を拾って、陽奈子に渡しながらベンチに座り、話し出した。

「葵祭で使う飾り物の『葵桂』は陰と陽、男と女を現しているんだよ。天に向かってそびえる桂は陽で男、地表に生えている葵は陰で女。両方とも清浄の象徴なんだよ。深い意味は他にもいっぱいあって長くなるから端折るけど、両方を身につけて神の守護を受けるという意味があるんだよ」

と神職らしい顔をした。

黄葉を顔の前でヒラヒラさせながら聞いていた陽奈子は「あつ！」と大声で叫んだ。

ギクツとした顔で自分を見詰めている寿之には目もくれず、いつも持ち歩いているエコバックがパンパンになるほど、桂の黄葉を拾い集めながら興奮した声で言った。

「私、この桂の葉を煮だして糸を染めるわ。葵の方は何とかものになりそうなどころまで来ているんだけど、いまひとつ、パンチのあるものを加えてオリジナリティーを出したいとずーっと考えていたの。」

今、寿之さんの話を聞いて考えが決まったわ。経糸は桂、緯糸は葵で染めた絹糸を使って着尺を織ることにするわ。母親という先輩がいるから、機に乗せるまでの下拵えは手伝って貰えそうだし。これでやりたかったことのスタートラインに立つことができるわ」

森林公園を散歩してから一年後、経糸の茶褐色の濃淡と、緯糸の浅葱色の濃淡が織りなす涼やかた着尺は完成した。陽奈子はこの織物に『葵桂縞きうけいしま』と名前を付けた。葵桂縞は新商品開発プロジェクトの審査を待っている。

薄闇にランプが灯れば花街は浮かれだす。

客をもてなす千代も茶屋の座敷で舞い踊る。

「栄える所に花街あり。羽二重王国『鯖江』の繁栄の証やで。芸妓も、よう心得ときや」

激を飛ばす置屋の女将は鼻肩客を逃がすなども釘を刺す。上客は芸妓の旦那候補だ。打算の思惑は鬢に秘め千代は香気を撒き散らす。

明治五年に芸娼妓解放令が発令されたものの二十年を過ぎても枕芸妓は多かった。むしろ芸を極めようと志を高くするほど援助を乞わねばならない。羽振りの良い旦那を持つことが芸妓の格を高めると言ってもよかった。

千代は、十二で置屋『天陽楼』に売られた。十八の時、横浜で絹問屋を営む伊吹が旦那になると告げられた。女将の決定は絶対だった。

「二代目のぼんが千代の舞に惚れたんやと」

「たとえ道楽でも、伊吹さんなら光栄です」

表向きは喜んでみせたが、正直誰が旦那でもよかった。伊吹が商いで鯖江に滞在する間従順な女を演じれば、年季明けまで面倒を見てもらえる。容易い契約だと千代は安堵した。

一年ほど過ぎたある日、仕事に差し障ると酒を節制している伊吹が深酒し酔い潰れた。

「どうされました？ お体に障りますよ」

氣遣う千代に、伊吹は荒々しく答えた。

「返品だよ。返品。フランスからな」

「返品？ 羽二重が？」

「ああ。染めあがり良くないそうだ。ドレスにならぬと。多少のムラぐらいなんだ。どこの国も女は贅沢だ。勝手ばかり言いやがる」

千代は自分も当て擦られている気がした。

しかし伊吹に無理を言ったことはない。口応えではなかったがつい言い返してしまった。

「ドレスのことはよう分かりませんが、うちかて長襦袢にはこだわります。贅沢やなんて言わんとして下さい。羽二重の良さを知っているからこそ、満足できる物しか身に付けとうない氣持の表れやないでしょうか」

「分かったような口をきくな！ 女のくせに」

「女やからです。……絹は特別やから」

伊吹は何も答えず、ふて寝してしまった。翌朝千代が目覚めたとき、伊吹はすでに旅館を去っていた。乱れない布団が虚しかった。

一ヶ月後、稽古帰りの千代は偶然伊吹を見かけた。逢瀬の約束はしていない。伊吹の軽装か

らも上氣した顔からも疑心が湧いてくる。

物陰に隠れた千代の鼓動が嫌な高まり方をする。近年、機屋や工場ができた区域とはいえ、その先には遊郭街がある。迂闊な物言いの後だけに憂いが広がるばかりだった。

まさか。仕事や。あほなこと考えんとき。

けれど一夜ごとに心許なさは増していく。次の約束の日まで千代は眠れぬ日々が続いた。

半月後伊吹はやってきた。が、早々に酔い潰れまたも千代に触れずに寝入ってしまった。

もう、うちには飽きたんやろか。

浴衣の袖から見える伊吹の手に目をやる。触れてもらえぬ寂しさからか、やけに綺麗に見える。爪も整い、きめ細やかさが際立つ。

と、ふいに姉芸妓のことを思い出した。

「姉さんの肌、艶っぽいですねえ」

単に素肌の美しさを褒めたつもりだったが、意外にも姉芸妓は頬を赤らめ、こう言った。

「恋……しとるせいやろか」

しかし男が恋して肌が綺麗になるとは思えない。が、女を抱くための手入れだとしたら。

「うちの考えすぎや。なあ、伊吹さん」

微動だにしない伊吹の背中に千代は呟いた。

その後、伊吹からの連絡は途絶えていった。最後の逢瀬から二か月後、千代は女将と呼ばれ

た。煙草を火鉢に投げ入れ女将は千代を見据えた。嫌な予感がした。

「伊吹はんがな、旦那をやめる言うてきてな。」

体中の血が凍りつく。が、平静を装う。

「さよですか。そんな気がしてました」

「知つとたんか。訳は千代には言うてないと」

「金で買われた身でも察することは出来ます」

「なら、ええわ。で、どうする？」

「どうする言われましたも、花街以外に生きていく場所はありませんから」

「せやな。あと少して年季明けやつたのになあ。結婚して横浜に行くもんや思とつたわ」

女将の言葉に千代は表情を硬くした。

「ま、あんたも色々考えたやろし、ここで生きていくつもりなら、また気張つてや」

「はい。よろしゅうお頼み申します」

千代は三つ指をつき深々と頭を下げた。支える指が畳にくい込みそうだった。

旦那に捨てられた芸妓は惨めなものだ。仲間は陰で薄幸を面白がり、客は興味本位な哀れみを押し付ける。千代はひたすら耐えた。

そんなある日、千代は急きよ新客の座敷に呼ばれた。予定していた芸妓が直前に腹痛を起こした、と女将に急き立てられ、何も知らされないまま千代は舞を披露した。

最も盛大に拍手をくれた客の隣に座する。

「いやあ、話に聞いた通りのええ舞やったわ」

「おおきに。あら？　うちが座敷に出ること知つとつたんですか」

「そりやもちろん。あんたの踊りが目当てや」

千代は首を傾げた。代役ではなかった。女将はなぜ一芝居うったのか。恐る恐る尋ねる。

「なんや、怖いわ。どこのどなたさんがうちの噂をしてはったんでしょう？」

「今、一緒に働いとる伊吹さんや」

「伊吹さんですって」

千代は思わず口を押えた。

「ほや。羽二重の精練場で、毎日汗まみれや」

「精練場？　横浜ですか？」

「何いうてるんや。わしのどどこに都会の垢抜け感があるっちゅうんや。鯖江や鯖江」

客は豪快に笑った後、事情を話してくれた。

「伊吹さん、絹問屋が立ちいかんようになってな。羽二重の工程を学び直すんやと。絹糸の知識から精練技術まで体に叩き込むそうや」

初めて聞く話に千代は狼狽した。

旦那をやめたのは女のせいではなかった。事業の失敗のためだったとは……。

「ほら、早よう酌してや」

客が盃を差し出した。我に返った千代は、慌てて徳利を持ち、酒を注ごうとした。

「あら？」

急に酌をやめた千代に客が問いかける。

「何や？」

「お客さんの手が……」

「手？」

客は盃を置き、かざした自分の手を不思議そうに眺めた。

「どっかおかしいんか？」

「いや。お綺麗な手やなあ思いました」

すると客は胸を張り、千代に両手を見せた。

「やろ。でっかい釜の湯に生機を浸して、生糸の糊を落とすことを『精練』いうんやが、湯上

げたあと、水洗いしながら羽二重を触つとると、つるつるになるんやわ。うちのかみさんも、

うらの手をよう褒めるんやで」

「まさか」

「ほんまやで。水を含んだ絹は重い。辛抱したご褒美をお蚕さんがくれるんやろって笑ろてる

けど、頑張れば頑張るほど手が綺麗になるなんて、男の仕事らしゅうないやろ」

客はそう言つて、「がはは」と笑つた。

なんてこと……。

知らなかつたとはいへ千代は慙愧に耐えなかつた。愚かな自分を責めた。

無礼を詫び、せめて援助の礼だけでも言いたい。千代が客に精練場の場所を尋ねると、稽古場に伊吹を見かけた辺りだという。

自分勝手な思い込みを笑いたくなる。けれど何かが吹っ切れた。思いが溢れてくる。

伊吹さんに会いたい。

千代は高ぶる心を押さえて客に酌をした。

「ほんまに、ようこそ来てくれはりました」

注いだ酒を、客は旨そうに飲み干した。

翌日千代は精練場に出向いた。工場入り口の引き戸が開き、咽るほどの湿気と熱気を連れて伊吹が姿を現した。白シャツにステテコ姿だ。頭を搔く伊吹は幻ではない。

「伊吹さん……」

懐かしさと恋しさで目元が滲む。

「悪かつたな、千代。本当は年季明けまで援助するつもりだった。でも出来なくてな」

「そんな……言うてくれれば良かったのに」

「金練りと雲斑のことで頭がいっぱいだった」

「くもむら？」

初めて聞く言葉に千代は首を傾げた。

「生糸の糊が落ちきつてないと羽二重に雲みたいなもやもやした跡が残る。で、それが大量に返品されてどうにもならなくなつた」

「だからって、なんでここに？」

「ただ売るだけじゃ駄目だと気づいた。羽二重の品質向上にも一役買いたい。だから今、各工程の職人さんから学んでいる。欧州で勝つために。いや、女性の心をつかむためにな」

悪戯つ子のように伊吹が笑う。

「伊吹さん、ごめんなさい。何も知らなかつたくせに偉そうなことを言つてしまつて」

千代が謝ると伊吹は首を振つた。

「痛いところを突かれたんだよ。おかげで意地も出てきた。なあに、すぐに職人商人になつて、横浜の店を立て直してみせるさ」

と伊吹は胸を叩いた。その手は更に艶やかになっていた。捨て身の労を目の当たりにし、千代は思わず懇願した。

「伊吹さんが……。伊吹さんが一生懸命仕上げた羽二重を、うちに売ってもらえませんか」
が、伊吹は頑なに首を振る。当然だと千代は肩を落とした。伊吹はきつぱりと言つた。

「千代には売らない。最上級に仕上げた羽二重を贈るつもりだ。もう少し待ってくれるか」
伊吹の言葉に千代は何度も何度も頷いた。

二年後。年季明けの朝、千代は灯らぬランプを見上げ、天陽楼に向かって手を合わせた。

「千代、行くよ。横浜行きに間に合わない」

伊吹の声に千代は新調した長襦袢が包まれた風呂敷を抱え直した。人力車から伊吹の手が差し出される。絹肌の男の手は力強かった。

二人は鯖江駅へと急いだ。

北陸本線の鯖江駅はお盆の帰省客で賑わっていた。八月の強い陽射しはアスファルトの温度を上げ、構内は暑さと人いきれで蒸されたようだった。私は大きな荷物を提げた乗客の列を抜け、駅の東口から往来に出た。駅のロータリーからは近松門左衛門の名が書かれた看板と青く澄んだ空が見えた。その以前と変わらない景色のなかに見慣れた眼鏡のモニュメントを見つけたときは、思わず過去の記憶がこみ上げてきた。八年前の私は確かにこの町で十代の多感な日々を送り、他の同級生と同じように窮屈な自由を持て余していた。

日本人の父親と台湾の母親の間に生まれた私は青年期までこの鯖江の町で過ごした。生まれて間もなく日本に移住していたが、国籍は中国籍のままだった。いわゆる在日中国人としての生活は日常にそれほどの支障をもたらすことはなく、同じ学級や部活動の仲間のなかに親しくする相手は多くいた。しかし、彼らとの間にはいつも薄い膜が張られているような息苦しい隔たりがあり、隣接する市の高校に進学するまで何でも打ち明けられることのできる友人にはついに恵まれなかった。

そんな私が唯一自分の素性の抵抗を受けずに付き合えたのは終山果歩という女性だった。彼

女との出会いは入学して間もない高校一年生の春に溯る。桜の花も散りはじめたある月曜日の朝、私は福井鉄道の座席に座って外の景色を眺めていた。通称福鉄と呼ばれる路面電車は鯖江から高校に通う学生の主な通学手段となっていた。車窓からは県道を走る乗用車や城山の背の高い木々が見え、田畑の広がる地域を抜けてふたたび市街地に入ると間もなく最寄りの駅に着く。私はいつもその景色を眺めながら通学時の憂鬱を収めるのが日課となっていたが、その日はこの日課を果たすことができなかつた。ふと、その車窓に人影が映り、後ろを振り返ると、同じ高校の制服を着た髪短い女性が目の前に立っていた。

「その眼鏡、うちのやつ」

女子生徒は私の掛けているべっ甲の眼鏡を指さして、意味の判然としない言葉を発した。彼女が指さした眼鏡は高校入学の記念に母親から送られたものだった。私はその不躰な態度を咎めるように眉間にしわを寄せたが、彼女はそれには頓着せずに言葉を継いだ。

「うちのお父さんが作ったの、その眼鏡」

「そう」

「なんか右側の柄の幅が合っていないね」

車内には同じ制服を着たたくさん生徒が言葉を交わしていた。彼女は手早く私の眼鏡を取り上げると、指定鞆から細い工具を取り出して柄の部分のネジを調節した。

「はい、これでよし。メンテナンスまでは無償でやってるのよ」

電車が高校の最寄り駅に停車すると、生徒たちはそれぞれの友人と連れ立って降りる仕度をはじめた。彼女は自分の名前を伝え、足早に改札へと向かっていった。改札の先では彼女の友人らしい二、三人の女子生徒が手を振っている。私はしばらく呆然とその後ろ姿を眺めてから、慌てて降りる仕度をはじめた。そのあまりに突飛な出来事に眼鏡の札を言うことさえ忘れてしまっていた。

それから朝の電車のなかでよく彼女の姿を見かけた。それは私が彼女の姿を目で追っていたからに違いなかった。彼女は私の視線に気づくと、小さく会釈し、早足に傍に来て私の眼鏡の具合を確認した。二人が親しくなるまでそれほど時間は掛からなかった。初対面の相手でもすぐに打ち解けさせるような親しさのある彼女には、私の人見知りを補って余りある魅力があった。私たちはそのうちに登下校を共にするようになり、休日には西山公園の動物園を回ったり、アル・プラザの敷地内にある映画館に行ったりした。それは長年住み慣れた家のなかで過ごすよりも心地の良い時間だった。両親の不仲はその頃から修復が難しいほどこじれていて、頻繁に不毛な言い合いを繰り返していた。私は彼女との間に出来事を共有するたびに打ち解けていった。

私たちの交際は、しかし、はじめから望まれたものではなかった。彼女の母親はすでに他界していて、父親は一人娘を溺愛していた。その父親が私たちの交際に反対した。そこに私の国籍の問題が含まれていたのかはわからなかった。ただ、二人の交際に何かしらの妨げがあるこ

とはある程度覚悟していた。私は二人の交際を自分や相手の親に承認される必要はないと考えていた。しかし、実直な性格の彼女は私の思いもよらない行動を取った。

高校生活はじめての夏休みが目前と迫ったある日の夜、家の二階にある部屋窓を小石が叩く音がした。両親はともに仕事に出ていて、私は一人で期末テストの勉強をしていた。窓を開けて外の暗がりを目を凝らすと、街灯の下に彼女が立っているのが見えた。彼女は、家出してきた、とだけ言って、数日分の荷物が詰まった旅行鞆を私の家の玄関に置いた。それはあまりに唐突な行動だった。その日は遅くに帰ってきた母親の許可を取って私の家に泊まることになり、事態はひとまずの落ち着きを見せた。母親が彼女の父親に事情を説明している間、私たちはテーブルを挟んで母親の出してくれた珈琲を啜っていた。

「僕は君のその突飛な行動だけはよく理解できない。別に父親の反対があったって、黙って付き合っていけばいいじゃない。こんなことしたら、それこそ二人のことを認めてもらえなくなるだろう」

「どうして親の目を盗んでこそこそと会わないといけないの。私たちは何もやましいことがないのだから堂々と交際していればいいわ」

「隠していたほうが上手く行くことだってたくさんあるよ」

「そんなことない。絶対にない」

私はいまでも彼女の言葉のなかに世間知らずな幼稚さを認めないわけにはいかない。それは

私のこれまでの経験からも確かだった。しかし、その時の結果で言えば、結局彼女の言うとおりになった。彼女の強情さについては父親を諦めさせ、私たちの交際は正式に認められることとなった。

それから私たちはよく父親の工房で眼鏡作りの手伝いをした。シート状の樹脂の内径を糸のこぎりで切削し、一つひとつ丁寧にヤスリをかけていく。彼女はその工房で見習いとして働き、将来は父親の跡を継ぐことを決めていた。私はその親子の息の合った作業を眺めながら工房の掃除をし、出来上がった眼鏡を型ごとに仕分けた。帰りが遅くなったときには父親の青い乗用車で送ってもらうこともあり、彼女と過ごす時間は家族との時間より次第に長くなっていった。私たちが交際をはじめて一度目の秋が過ぎようとしていた。

高校二年生への進級を間近に控えたある日、私たちの交際は唐突に終わりを迎えることになった。それまで仲違いをしていた両親はついに離婚を決め、私は母方の実家がある台湾に行くことになった。それは私わがままを通せば解消できる取り決めではあった。しかし、その頃の母親のひどく消耗したような様子を見ると、それを口にすることはできなかった。私はもう母親を支えなければならぬ年齢になっていた。人生のうちに自分で選択できないことは少なくとも、両親の離婚による環境の変化はその一つに違いなかった。

その話を切り出したとき、彼女はそれほど困惑しなかった。私たちは西山公園の展望台に並んで立っていた。桜の木はまだ芽吹いたばかりのつぼみをつけ、私はもうこの桜の満開に咲き

誇る姿が見られないことをあらためて寂しく思った。彼女はしばらく黙ったあと、おもむろに口を開いた。

「あなたはどうしてこれがお別れだというの」

「僕たちはまだ子どもだし、日本と台湾じゃあまりに距離がありすぎる。どうしたっておいそれと会うことはできない」

「でも私たちはあと数年後にはもう大人になるでしょう。大人は何だって自分の力で叶えることができるんだわ」

西山公園から見下ろせる鯖江の町並みに視線を向けながら話す彼女の声はわずかに震えていた。私は彼女との交際の期間から、その気丈さのなかに弱さが含まれているのを知っていた。

彼女は言葉で物事が良い方向に向かうと信じていた。例えば彼女の母親が亡くなったとき、眼鏡製造の技術を後世に残したいと願う父親の跡を継ぐと決心したとき、あるいは私たちの仲を父親に認めさせたときにも、彼女は自分の発した言葉を強く信じることで、その先の未来を明るいものにしてきた。それはやはり私にはない魅力に違いなかった。

「君にはかなわない。君がそう信じるのなら、僕は必ず戻ってくるのだろうね」

午後の陽が射す駅のロータリーには出迎えの車が列を作っていた。帰省客がそれぞれの車に乗り込む様子を眺めてから、私はもう一度見慣れたモニュメントに視線を移した。台湾に移つ

た私は二年間を地元の高校に通ったあと、大安区にある大学に進学し、ライティングの勉強をした。卒業後はある出版社に入社し、台湾の若者向けの情報誌に日本の記事を書く仕事に就いた。私の記事は一定の層に受け入れられ、入社して三年目に東京にある日本支社に配属されることとなった。

町の東から吹く風が私の前髪を揺らした。私は少し伸びすぎた髪をかき上げながらロータリーに進入してくる一台の乗用車に目を留めた。その青い乗用車は少し危なげに減速しながら、ゆっくりと私の目の前に停まった。

「おかえりなさい」

八年ぶりに再会した彼女は、少し大人びた瞳を細めて、はじめて出会った日のように私の前に立った。そして私の顔に手を伸ばし、べつ甲の眼鏡に触れた。

「ほら、わたしの言ったとおり」(丁)

春が近づいているのに、心は重い。

後期試験の成績は最悪、結果、追試に次ぐ追試。薬理学に免疫学、病理学も。

二年前、東京の医大に合格したときから、カリキュラムのきつさは覚悟していた。でも、これほどとは……………。

春休みの帰省を待っている鯖江の母さんに「追試に受かるまで帰れない」とメールしたら、すぐに電話がかかってきた。

「大丈夫よね、進級できるわよね」

「まあ……………、なんとか」

これ以上滅入りたくなくて、話をそらした。

「みんな、元気？」

「うん、まあ」

今度は母さんの歯切れが悪くなった。

理由はわかっている。今年八十八になるばあちゃんに変化の兆しが表れ始めたのだ。正月に帰った時も、明らかに元気がなかった。

「おばあちゃん、この頃、私の花柄のエプロンを欲しがったり、急に、昔の歌を歌ったりするのよ」

「歌？」

「お父さんは、女学校の頃か自分に代わっているんじゃないかって、言うんだけど」

女子高じゃなくて、女学校っていうところが、ばあちゃんの年齢を感じさせた。

「病院にも連れていったけど、年が年だから仕方ないって。でも、翔ちゃんの顔を見たら、元気になると思うわ」

母さんの言うとおりで、ばあちゃんは昔から、俺のことをとても可愛がってくれた。ばあちゃんのためにも、追試をクリアして早く帰りたい。そう思うと、やる気がでてきた。

「ただいま」

実家に着くなり、玄関近くの和室の襖を開けると、ばあちゃんはこたつに入って、ぼんやりとテレビを見ていた。

元々痩せていた体は、また一回り小さくなったようだ。

「耳も遠くなったのよ」

傍らで、母さんが大きな声をあげた。

「おばあちゃん、翔ちゃん。翔ちゃんが帰ってきたよ」

さすがに気がついて、顔を横に向けたばあちゃんは、次の瞬間、目を大きく見開いて、信じられない、という表情をした。

「隆一さん」

—えっ。

十年前に死んだじいさんの名前を聞いて、俺は一瞬、固まった。

「隆一さん、どうして？」

—どうしてって聞かれても……。

母さんがさらに声を張りあげた。

「やだ、おばあちゃん、翔ちゃんよ。翔ちゃんが大学の春休みで東京から帰ってきたの」

「大学がお休みで、隆一さん帰ってこられた」

「違うわよ、おじいちゃんじゃなくて、翔ちゃん、翔太！」

ばあちゃんはまじまじと俺の顔を見て、それから、あ、と小さく呟いた。

「……翔ちゃん。そう、翔ちゃんね」

ようやく孫の存在に思い至ったようだ。

なんとか我に返ったばあちゃんは、ぼつが悪そうに微笑みながら、少し肩を落とした。

「おじいちゃんと間違えるとはねえ」

居間で、母さんが吐息をついた。

「そんなに、若い時のおじいちゃんに似ているのかしら」

—どこが？

仏壇に顔を向けると、白衣姿のじいさんと目があつた。

遺影の中でも、じいさんはきりつと引き締まった顔つきで、前を見つめている。

亡くなるまで町の中核病院の名誉院長だったじいさんは、腕の良さと患者思いで評判の内科医だった。

でも、家族には全然優しくなかった。特に、たった一人の孫の俺にはやたらと厳しかった。

学校のテストだけでなく、日常生活でも人の名前や約束の時間などを間違うと、もつと注意しろつ、と頭ごなしに叱られた。

一度、人間なんだから間違いはあるよ、と反論したとき、

「お前はミスをしてはいかんつ」

凄まじい勢いで怒鳴られた。

だから、俺もじいさんを敬遠していた。甘えた記憶とか全くない。

ばあちゃんはそんなじいさんの遠縁にあたり、東京の医大を卒業して、鯖江に帰ってきたじいさんの許に嫁いできた。

子どものうちに、親に結婚を決められていた間柄だったという。

「おばあちゃん、翔ちゃんを見て、許婚者だったおじいちゃんの帰省を待っていた女学生の頃にかえったのね」

「親が決めた相手だったのに、そんなに好きだったのかな」

クソ真面目なじいさんは、全然、女性にモテそうなタイプじゃなかった。

ばあちゃんも地味な性格で、趣味といえば、機織りくらいだった。

昔はよく、実家から持ってきた石田縞の織機で布を織り、手提げ袋やマフラーを作っていた。でも、その織機も今は、庭に面した廊下の隅でカバーをかぶったままになっている。

三年前、織機の音が孫の受験勉強の邪魔になってはいけなから、と言って、ばあちゃんは機織りを控えた。それがきっかけで、織り方を忘れてしまったのかと思うと、胸が痛んでしかたない。

その夜、家族みんなで食卓を囲んだが、ばあちゃんに特別変わった様子はなく、父さんや母さんと普通に話をしていた。

「翔ちゃんが帰ってきて、自分がおばあちゃんだつてことを思い出したのよ」

母さんの言葉に安心して、二階の自分の部屋に戻り、荷物の整理を始めた。バッグから春休み中に目を通そうと思っていた参考書を何冊か取り出すと、溜息が自然に漏れた。

医者になるには覚えなければならぬことが多すぎる。今から顎を出しているような状態で、

本当に国家試験に受かるのか。

心が不安の黒雲に覆われたとき、廊下のほうから低い歌声が聞こえてきた。

ドアから顔を出すと、階段を上ってきたばあちゃんが驚いて足を止めた。

「隆一さん？」

なんかまた、女学生時代にワープしているみたいだ。

「あの……、あの、隆一さん、この間」

ばあちゃんもじもと話し出した。

「言っていたでしょ、『ミスが許されない仕事につく。だから俺はミスをしてはいかん』って。私、すごいと思ったの」

「えっ、それって……」。

まさか、ばあちゃんの口から、じいさんが長年、俺に投げつけていた言葉が出てくるとは思わなかった。

「もしや、じいさん……」。

予感していたのだろうか、孫が将来、自分と同じ道に進むって……」。

棒立ちになった俺を、ばあちゃんは心底、感心しているという様子で見つめている。

「本当にすごいと思います」

俺は、意を決して言った。

「あんなにきれいな石田縞を織るのも、すごいと思うけど」
ばあちゃんは頬をまつ赤にして、俯いた。

翌朝、がしゃ、がしゃ、という音で目が覚めた。

急いで着替え、階下へ降りると、織機に向かっているばあちゃんの姿が目に入った。

―織り方、忘れていなかったんだ！

「おはよう、ばあ」

と言いかけて、あわてて口を閉ざす。

俺はまだ、ばあちゃんの脳内で、フィアンセの隆一になっているかもしれない。

俺に気づいたばあちゃんが手を止めた。

「隆一さん、こんなに朝早く、どうして？」

……やっぱり、なっていた。

「いや、まあ、あ、何を織っているんですか？」

織機には無数の青い糸がかけられている。

「隆一さんのマフラーです。東京もまだ寒いのでしよう。私、隆一さんが頑張り屋さんだって、よくわかっています。でも、少しはご自身のお体も大事にして頂きたいのです」

ばあちゃんの言葉を聞いて、ふと在りし日のじいさんの姿が脳裏に浮かんだ。

朝から順番を待つ外来患者の多さにも夜間の急患対応にも、愚痴ひとつこぼしたことはなかった。近所で急病人が出たと聞けば、飯の途中でも箸を置いて駆け出していった。

—優しい人だったんだ、とても……。本当は俺にだって優しくかったから、俺が将来困らないよう厳しく接していたんだ。

努力家で仕事熱心で、優しいなんて、男として最高じゃねえか。

そんなじいさんをばあちゃんは心から敬い、慕っていた。いや、今も好きだし、これからもずっとずっと、好きなんだろう。

一週間後、俺はばあちゃんが織りあげたマフラーを首に巻いて、家の斜め前のバス停に向かった。

しばらく待って、やって来た駅行きのバスに乗り、車窓に目を向けると、通りの向こうで、母さんとばあちゃんが並んで立っていた。

見送りはいいって言ったのに、二人とも手を振っている。赤い花柄のエプロン姿のばあちゃん、半分泣きながら笑顔を作っている。

—俺も頑張るよ。じいさんみたいな立派な男に、医者になりたいから。

バスが動き出し、手を振るばあちゃんの姿が遠ざかっていったとき、俺は心の底からそう思った。

幼い頃、祖母に髪を結われるのが好きだった。髪に触れられるたび、大きな手に包まれて褒められている気がした。お前はいい子だよ、と。

物心がついた頃には、私には父がいなかった。母はいつも愚痴ばかりで怖かった。母の仕事が終わるまで、私は祖母宅に預けられた。祖母は優しくかった。母と違って、よく笑う人だった。今でも祖母の穏やかな笑い声が、不意に鼓膜の奥でよみがえる。

私が七歳の時、祖母は他界した。苦しげに咳を繰り返し、最期には体中から管を通して息をひきとった。祖母と入れ替わるように、新しい家族がやってきた。母の再婚相手と、その息子の奏一郎。彼は当時、十七歳だった。歳の離れた兄と、よく知らない父。彼らに笑いかけられない、初めて見る表情。そんな大人達に囲まれて、私は喘息を引き起こした。夜中でも止まらない咳と息苦しさの中、思いつくのは祖母だった。祖母もこんなふうに着替えて布団の中で苦しんでいた。だから私も近いうちに、消えてしまおうかと思っていた。

病床につく私に、兄は世話を焼いた。兄なりに、新しい家族になじもうとしたのだろう。ある日、髪を乾かしていると、髪がドライヤーの吸気口に絡まってしまった。

「ちよっと何やってんのよ」と母が鬱陶しそうな声をあげて近付いてきた時、兄が走ってきた。

「怪我はないか？」と絡まった髪を抜き取り、私の髪を梳いてくれた。大きな手で髪を撫でられる感触は、祖母よりも力強く、絶対的に安心できる何かを守られている気がした。そして、祖母がよく言っていたあの言葉を、兄も言ったのだ。

「きれいにしないと。髪は、女の命だから」

祖母は、私の髪をきれいだと褒めていた。夏実の髪は、漆刷毛になる。越前漆器を塗る刷毛になるから、切った髪は取っておきなさい、と。祖父は塗師屋という、越前漆器を作って生業としている職人だった。祖父は私が生まれる前に他界していたが、母の兄が家業を継いでいた。祖母宅には、赤や黒のお椀や箱が並べられていた。私は祖母に言われたとおり、美容院で切った髪を祖母宅へ持って帰った。祖母はそれを、黒い漆器の箱にいったん入れていた。漆刷毛を作る人に渡すのだと言っていた。祖母の死後、その黒い漆器は形見として私の手元にある。

髪は女の命と言われ、私は兄に聞いた。

「命って、どこに行くの？」

髪を梳いている兄の手が止まった。

「おばあちゃんは、どこに行ったの？ ナツミの髪、ウルシバケになるの。おばあちゃんがないと、髪切れないよ。おばあちゃんの命、どこに消えたの？」

「おばあちゃんは天国に行ったんだよ」兄は言った。「天国はすごく遠いから、おばあちゃんはまだ戻ってこられないんだよ」

唐突に泣き出した私の涙を、兄が親指で拭った。

「これからは、髪を切ったら、お兄ちゃんに持つておいで」

それから七年間、共働きで遅くまで仕事をしている両親に代わって、兄が私の面倒を見てくれた。私は、同級生のどの男子よりも、兄をかつこよく思った。兄は美容師となり、二十四歳で家を出た。私はまだ十四歳で、一人で暮らしたいと言い出した兄の気持ちが理解できなかった。

「お兄ちゃん、私のこと守るって言ったのに」

「いつでも遊びにおいで」という兄の服の袖をつかんで、私はせがんだ。

「お別れのキスして」

兄は困ったように笑って、私の額に口づけた。

「ここにも」と唇をつきだした私に、

「大人になったらね」と兄は私の頭を撫でた。

「大人っていつ？」

「もつと、いろんな経験を積んで、それからだよ」

兄が結婚相手を家に連れてきたのは、兄と離れて四年が経った春だった。私は髪を伸ばし続けていた。たまにしか会わなくなった兄に、長い髪を結って欲しかった。なによりも兄に妹でなく恋人と認めてほしくて、願をかけていた。早く大人になりたくて、年上の男性と親しくし

たこともある。しかし、他の男性にいくら優しくされても、心の真ん中に居座り続けるのは兄だった。

義理の姉となる人は、兄よりも三つ年上の、細身の女性だった。兄は彼女をカオリと呼んだ。私を呼ぶ声色より少し高く、せつなげなトーンで。二人は時々、指を絡めて手をつないだ。私は両親の隣で、うまく笑えない笑顔を浮かべて、二人を眺めていた。

翌日まで兄は休暇をとって家にいた。朝、泣き腫らした目を覚えたてのアイシャドウでごまかして、兄の部屋へ入った。

「髪、切りたいの」

庭に新聞紙を敷き、丸椅子に座って、私は私自身を兄の手に委ねた。

「夏実の髪は、ずっときれいだな。……本当に、肩の上まで切っていいのか？」

何度も確認する兄に、私は深く頷く。風呂敷を肩に巻かれ、小気味よい鋏の音を耳の後ろで聞く。背中を隠していた髪が、消える。兄が、切った髪を私に見せた。

「重いぞ。夏実が生きた証だな」

「そんな大げさなものじゃないよ」

願をかけていたなんて告白できる勇氣は、もうない。

「大げさでいいじゃないか。夏実が今日まで生きてきたこと。あれから発作はないのか？」

「ないよ」

兄が家を出た直後、私の喘息はぶり返した。でも、吸入器を持って駆けつける兄はいない。私の体はいつのまにか、兄がいなくても生きていけるよう成長した。

「よし」 鉄を置く音がして、風呂敷が取られる。髪に触れていた手が、離れていく。

「お兄ちゃん、結婚、おめでと」

昨夜から言おうと決めていたのに、いざ言ってみると涙が出そうになって唇を噛んだ。熱くなる目元を、兄が真正面からのぞきこんでくる。

「夏実、俺……」

「大丈夫、泣かないよ。私、少しは大人になったかな？」

なんとか笑顔を作ろうとした私の肩を、兄は抱いた。そして、震えのとまらない唇に、兄がそっと口づけた。髪を撫でる手と同じように、温かい感触が体中に広がる。

「夏実が妹じゃなかったら、俺は……」

兄の泣きそうな声を、私は初めて聞いた。その時、また髪を伸ばそうと決めた。報われなくても、この想いを髪に刻む。私は切った髪を、祖母がくれた漆器の箱に納めた。

兄が結婚してからも、私達は家の外で会った。会うたびに求めあった。私達はもう兄妹ではなくなった。彼に抱かれ、女としての体がひらかれていく。離れがたい一つの塊のように、互いの体を絡めあう。しかし彼は、他の女のもとへ帰っていく。これが私の望んでいた彼だったろうか。ずるい人だと憎みながら、そうやって苦しむ気持ちでさえ愛しかった。彼を想うと、

自分の命が明るく燃えて、輝いている気になれた。

二十歳の春、大学の授業を終えて駅前の喫茶店に入った。カオリさんは先に席についていた。彼の妻に呼び出されることが何を意味するのか、もうわかっていた。私はコーヒートを注文し、彼女と向き合った。彼女は鞆から母子手帳を取り出し、机に置いた。

「子どもが出来たの」

先週、奏一郎からも同じセリフを聞いた。もう終わりにしなければいけないよ。彼は泣きながら私をあやすように抱いた。私はあふれる涙を彼の胸にうずめたが、心のどこかで彼に冷めていた。

「夏実ちゃん、奏一郎と兄妹以上の関係があるんでしょう？」

私は頷いた。声が出ない。

「ずっと気付かないふりをしていただけ、だめよ。はじめをつげなきゃ」

ウエイターがやって来て、コーヒーと伝票を置いていった。私はそれに手をつけず、彼女の首元を飾る上品なネックレスを眺めていた。あれは、彼がプレゼントしたのだろうか。

「奏一郎とは二人で会わないって、約束してくれる？」

「わかりました」と私は言った。自分でも驚くほど冷静に、言葉が出てきた。「もう終わりにします」

「そう」彼女は何か言いたそうに唇を動かしていたが、黙った。しばらく沈黙した後、口を開

いた。

「夏実ちゃんはまだ若いから、これからいくらでも選択肢があるわ」

彼女は立ち上がり「これ払っておくから」と伝票を取り、去っていった。彼女が視界から消えた途端、体中の水を吐き出すように私は泣いた。深くうつむいて髪で顔を隠し、嗚咽を堪えた。私の髪は、泣きつ面を覆うにはじゅうぶんすぎるくらい、長く伸びていた。

翌月、私は大学近くの街に引越した。両親は私の一人暮らしに反対しなかった。そもそも通学に往復三時間以上かかるのに通っていたのは、実家に残る兄の面影にしがみついていたからだ。引越が終わるとすぐに、新しい街の美容院で髪を切って持ち帰った。そして、漆器の箱にしまつてあつたかつての髪とあわせて、漆刷毛に寄付した。

空いた漆器の前に、次はこの箱に何を入れようかと思案する。不意に、切った髪を重いと見せてきた兄の笑顔が脳裏をよぎる。艶を放つて黒光りする底面から、手放したはずの兄との思い出が湧き出てくるようで、私は蓋をかぶせた。押し入れにしまつておこうと持ち上げると、ずしんと重く響いた。

白い天井、白い壁、微かな消毒のにおい、見知らぬベッド。……病院だろうか。窓から少しだけ、外が見えた。重く立ち込めた雲、窓ガラスにバチバチと当たっては流れ落ちる雨。起きようとすると、足がズキズキと痛んだ。思わず顔をしかめる。……そして、ふと思いついた。確か、雨が降っていた「最悪」なあの日の出来事を。

その日も、激しい雨の日だった。あと数分でバスが発車してしまうという焦りでいっぱいだった私は、点滅し始めた信号を渡り切ろうと走り出した。しかし、道路の真ん中で、人にぶつかって転んでしまった。私の近くを車が通って、水が大胆にかかる。制服のスカートも新品のローファーの中もずぶ濡れだ。「最悪……。ツイてないなあ……。」と呟いて、立ち上がろうと手をついた瞬間、耳をつんざくようなクラクションが鳴り響いた。驚いて顔を上げる間もなく、水しぶきを上げたトラックが間近に迫っていた。ハッと息を呑む。足がすくんで動けなかった。どうしよう。足に力が入らない。生まれて初めて、死んじやうかもしれない、という諦めにも似た思いが脳裏をよぎった。その瞬間、誰かに手首を引っ張られた、ような気がした。その直後、足に激痛が走った。薄れゆく意識の中で、同じ年くらいの男の子が目に入った。同じ中学

の制服、スマートな黒縁眼鏡、その奥に見えた、とても真剣な眼差し。それを最後に、私の目の前は真つ暗になっていった。

気が付くと、雨は止んでいた。ドアが開いて、母が入って来た。「大丈夫？」私はこくりと頷く。事故から2日間も眠っていたようだ。「もしあの時、人が助けてくれていなかったら、命を落としていたかもしれないだろうよ。骨折はしちゃったけれど。」そう、あの眼鏡の人が助けてくれた。そのお陰で私は今、生きることができている。未だに彼の眼差しが脳裏に焼き付いて離れない。同じ中学校なら、あの眼鏡を頼りに彼を探して、お礼を言うことは可能だろう。そんなことを考えながら、彼を思い出すたび、今まで感じたことのないような胸の高鳴りを感じる。私は、名前も知らない、命の恩人である黒縁眼鏡の「彼」のことを暇さえあれば考えるようになっていた。

一か月程で退院ができ、学校に復帰した。友達がたくさん心配してくれた。復帰して最初の授業は理科。教室を移動しなくてはいけないため、階段をゆっくり登っていると、向こうから見覚えのある人が歩いてきた。自分の顔が少し赤くなったのが分かる。黒縁眼鏡の「彼」だった。持っていた教科書をチャリと盗み見ると、「三年二組 草間」と書いてあった。

昼休みになると、私は三年二組に向かっていた。心臓が耳元にあるように自分の鼓動が聞こえている。小さく息を吸ってから、私は口を開いた。「あのつ、草間先輩はいますかっ？」声が裏返ってしまったが、草間先輩は笑いながらこつちに向かって来てくれた。「俺に何か用？」思いがけず向こうから話しかけてくれたことで、頭が真っ白になってしまった。「え…えっと、一か月位前に…、た、助けていただきました。あの時は、本当にありがとうございました！」なんとかお礼を言えたが、顔が火照って爆発しそうだ。「あ、あの時の。同じ学校だったんだ。無事退院出来て良かったな。足は大丈夫？」私は小さく頷いた。…これ以上ここにいたら、緊張で心臓が持たないんじゃないか、そう思った。「じゃ、失礼します。」「うん、また今度。」出来る限りの速さでその場を去り、トイレに駆け込む。息が乱れて、鼓動が激しくなっている自分に驚いた。

その日から、黒縁眼鏡の「彼」、草間先輩は、私と逢うたびに片手を上げて微笑んでくれるようになった。そのたびに胸がキュツとなる。毎日毎日、ドキドキが止まらなかった。そして、初めて話した日から一か月位が過ぎた日、友達と昼休みに話していると、それぞれの好きな人の話、いわゆる「恋バナ」になった。それまでは口下手でそんな話題に興味がなかった私は、昔から男友達、ましてや好きな人なんていなかった。だから、隣に座っている友達に、「ねえ、好きってどんな感じ？」彼女は一瞬、目を丸くさせた。そして、「かわいいなあ。」と微笑ん

だ。何が？どういうこと？と混乱している私に彼女は教えてくれた。「好きっていうのはね、話すたびにドキドキしたり、嬉しくなったりするの。相手がする小さなことで顔が火照ったり……、心臓がバクバク言ってる鳴り止まないし、いつの間にか目で追っちゃう……。こんな感じかな。」彼女が言ったものは、先輩に会った時の私にぴったりと当てはまった。じゃあ……。私が先輩を好きだったこと？でも……。助けてもらっただけで？色んな疑問が浮かんで消える。やっぱりよく分からなかった。ハッと我に返ると、友達全員がニヤニヤして私を見ていた。気づいた時にはもう遅かった。……。誤解されてる。多分、全力で否定しても信じてもらえないだろう。一番ニヤニヤしていた友達が「好きな人がいるんなら、告白しちゃえば？」と言ってきた。でも……。付き合うようなことは求めてはいない。それを伝えると彼女は、「好きって言うだけでも告白だよっ！」と笑った。「じゃあ、してみようかな……。」そう呟くとみんなは嬉しそうに微笑んだ。

私は早速、三年二組の教室に向かった。先輩はすぐに気づいてくれた。「先輩……。今日の放課後、四時に図書室に来てもらえますか……。」それだけ伝えると逃げるように教室に戻った。顔が熱い。心臓が鳴り止まない。午後からの授業は全く手に付かなかった。気が付くと四時が近くなっていた。友達にはひと通り声援をもらって、私は図書室へ向かった。ドアをガラガラと開ける。昼休みの後から降っていた雨のせいで、図書室は思っていた以上に暗かった。大き

く息を吸う。私の少し後に先輩が入って来た。眼鏡の黒い縁がキラリと光った。「好きです」この言葉を伝えなくてはならない。私の命の恩人であり、「初恋の人」である先輩に……。

私の想いを伝えた後、先輩の顔は真っ赤に見えた。少し間が空いて、先輩は私の耳元で何かをささやいた。

……それは、私にとって嬉しすぎる言葉だった。

二人で玄関を出ると、いつの間にか雨は止んでいて、きれいな虹が出ていた。その虹は、どこまでも伸びていた。

「最悪」なあの日 of 出来事。……でも、今はもう「最悪」ではなくなつた。
なぜなら、そのおかげで黒縁眼鏡の「彼」、草間先輩に出会えたのだから。

近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット + KOIBANAめぐり

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

2013年 近松の恋物語が360年の時を経て現代によみがえる…



近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット+
めぐり



近松の里
たちまち
スタンプ
ラリー



こちろもアキパワー情報

「春を抜き、楽を与える」名号岩

●名号岩 (みょうごういわ)

天神山麓の大岩石には、天保13年(1842)に刻まれた「雨無阿弥陀仏」の名号が深く刻まれています。名号には救苦と楽の働きがあるとされ、通行する人々に唱えさせるものだと言われています。



伊野姫パワーで待ち人来る

●越智神社 (おちじんじや)

奏進大師のその母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社。古く奏進大師が子供の頃に母親が降り立って待っていたという伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



近松門左衛門が幼少期を過ごした、「近松の里 たちまち」、古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒を忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒してくれる力があります。そんな「近松の里 たちまち」は、2013年に近松門左衛門生誕360年を迎え、それにあわせて「さばえ近松文学賞 恋話(KOIBANA)」の募集を始めます。この冊子では、近松ゆかりの歴史と自然があふれる場所と、そこに咲く花に込められた恋話＝恋花メッセージをご紹介します。すべての場所を巡って、時を越えて人を元気にする近松のパワーに触れてください。

【この本の使い方】

近松にゆかりのある
パワースポットを、写
真と文章で紹介

訪れた記念に、
ちかもんくんスタンプ
を、押しましょう!

それぞれの場所に設置され
た「近松の里めぐり物語
BOX」「近松の里めぐりBOX」
の中に、スタンプや情報誌
が入っています。



「見どころ」「なんだろう」
「ひとやすみ」の3つに分
け、その場所ならではの
ポイントを紹介

「近松との縁」では、近松
門左衛門の幼少時代を振
り返ります

さらに!応募してゲットしよう!

ぐるっと
まわって
12
ポイント
越前澤器製三科益特製絵馬
をもらおう!

別紙の応募ハガキに12カ所のスタンプを全部兼ね、必要事項をご記入の上50円切手を貼り郵送してください。後日「近松の里 たちまち パワースポット+恋話めぐり」証明書とちかもんくんグッズを郵送いたします。開題日には、立待公民館・まなべの館でも受け取ることができます。また、Wチャンスとして毎年10月に開催される「たちまち 近松まつり」で抽選会を行い、抽選で「越前澤器特製三科益特製絵馬」をプレゼントいたします。

※詳しくは応募用紙をご覧ください。



恋話＝恋花(KOIBANA)

恋話を題材とした作品が多い近松門左衛門。「近松の里 たちまち」めぐり、各所で見かけた花々にも、昔から伝わる「恋話」や花の名を録んだ「恋歌」が存在します。花言葉と恋話&恋歌を紹介しながら、プチメッセージを届けます。

2013年、近松門左衛門生誕360年『曾根崎心中』初上演310年を記念して

さばえ近松文学賞
恋話を募集します。

【テーマ】

近松の恋愛が時を越えて
現代によみがえる

(400字詰め原稿用紙5枚程度)

map ナンバー

1

近松門左衛門記念碑庭園

(近松の里めぐり情報館)

ちかまつもんだえもんきねんていえん



東洋のシェイクスピアと称される近松門左衛門は、鯖江市が誇る劇作家。近松が幼少期を過ごした「立待」をめぐる旅は、ここ杉本町の立待公民館敷地内にある近松門左衛門記念碑庭園から始まります。庭園は、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏になるとサツキの花で彩られます。正面奥に近松の辞世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が越前を離れるまでの解説が記されています。庭園手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。



見どころ



近松の里めぐり情報館

立待公民館内にある「近松の里めぐり情報館」では、ただ一人の吉江藩主「松平昌親公」や、元禄三大文豪のひとつ「近松門左衛門」と鯖江との関わりについて紹介しています。文庫の人形や衣装等の展示をはじめ、鯖江市在住の創作粘土人形作家かとうかずお氏による近松と鯖江に関するジオラマ風人形や、映像、展示等があり、子どもから大人まで楽しみながら、近松の幼少時代を振り返ることが出来ます。



七歳で最期の足跡の人形



ここにスタンプをおしてね！
+この世初の聖地で！
物語BOXにスタンプが入っています。



サツキは「ツツジ」の別名で、里が小でくても咲きます。



サツキ(杜鵑花) 花言葉: 協力を得られる、節約、野制

恋話

KOI BANA

中国の伝説、蜀の地に天から下った「望帝」という王がいました。その地へ治水に詳しい「べつぎ」がやって来ます。べつぎの留守中、その妻と通じてしまった望帝は自分を恥じ山の中に隠れ、苦悩の糸、死んで杜鵑(ホトトギス)に生まれ変わります。最も優しくも激しく情を燃やした血が地上に落ち、そこから美しい花が咲き、杜鵑花と呼ばれたとされています。

春メッセージ「何事も度を越さないよう、控えめに」



水の神(龍)と、生命の再生(蛇)のお話が伝わる

map ナンバー

2

西光寺表門

さいこうじおてもん



全国でも珍しく殿号と呼ばれる寺院「石田殿西光寺」は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、廃藩となった吉江藩邸(館)の門が西光寺に移築されたと伝えられています。薬医門形式の門は寺院としては特異であり、建築様式でも江戸時代中期の特長が認めらることなど、当時の面影を残す希少なものと云えるでしょう。国の有形登録文化財に指定されています。



ここに
スタンプを
おしてね!
そこの世社の壁のてり
物館80Xに
スタンプが
入っています。



? なんだらう

「じゃぼんこう」の由来
江戸時代、西光寺に迎えられた第10世・寂周は、生来病弱だったため、乳母「お通」が同行、献身的に世話をします。やがて、病癒の再来とされるほど人々の崇敬を集めた寂周でしたが、徳望が高まるほど健康が気がかりなお通。ついには自分の命を寂周に捧げて欲しいと池に身を沈めます。その年の報恩講は雷雨となり、池から龍(蛇)となったお通が舞い上がったという伝説から「報恩講」が「蛇恩講」、「じゃぼんこう」と言われるようになりました。



近松との縁



大イチョウ

西光寺の境内にある推定樹齢400年の大イチョウは、立役の歴史を見守ってきました。秋になると黄金色に輝く木を見上げ、銀杏拾いを楽しんだ幼い近松が思い浮かびます。



ケイトウ「繡縵」(からあい) 花言葉: 色あせぬ恋、情愛、おしゃべり

恋話
KOI BANNA

「秋さらば 写もせむとわが蒔きし 繡縵の花を 誰か採みけむ」(与謝蕪村)
秋に染めようと思って蒔いた繡縵の花が、誰かに摘まれてしまった。繡縵の花は「思い人」を意味しています。

※メッセージ「時機を見極め、後悔するまえに告白を」



不動明王に見守られて力が湧いてくる

map ナンバー

3

糺野お清水

ただずのおしょうず



老杉が生い茂り、清水の湧き出る様子が京都の糺野に似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになりました。糺は鯖江台地の北西に位置し、大地と平地の間から湧くお清水は、神事に使われる名水として古来より大切に扱われてきました。また、野菜や農機具を洗う場所が区別され村人の生活にも欠かせない水でもありました。かつて数カ所あったお清水も、こちらを残すだけとなり年々その水量も減りつつあります。いつの日か、こんこんと湧くお清水に戻したいものです。立待村志には、糺に「糺清水」があったことが記されています。



? なんだらう



お清水を守る白不動明王
糺野お清水に祀られているのは、右手に剣を持ち、左手に鏡を持つ白不動明王。あらゆる「魔」を滅ぼし、幸福を与えらるる仏様は、昔も今も糺野お清水の水源を静かに見守り続けます。



近松どの縁



水路脇に隠れるように存在する糺野お清水

清水川から西光寺前を流れる水路脇に、今は一つになってしまった糺野お清水があります。近松の頃は、数カ所のお清水が水量も豊かにこんこんと湧き出ていたそうです。



ここに
スタンプを
おしめてね!
その
近松の里のBBOXに
スタンプが
入っています。



水際に咲く白い花



パンジー(すみれ) 花言葉:物思い、私を思ってください、私はあなたを思う、純愛

恋話
KOH BANA

ヨーロッパでは古くから、愛する人に「天使に愛された花」のいい伝えをもつパンジーの花を贈ります。天使に愛された花が奇縁を起こしてくれそうです。

※メッセージ「素直な気持ちも、花に託してみても」



人と人を繋ぎ、物事をスムーズに運ぶ

map ナンバー

4

石田の渡し場跡

いしだのわたしばあと



江戸時代から明治頃まで、水量が豊富な日野川では船を利用して「河川交通」が盛んでした。米やさまざまな物産が船積みされ三回湊まで運ばれました。古い文献によると、この石田にも舟渡し場があったとされ、日野川に交差する「浜街道(越前海岸から吉川に至る街道)」の渡し場として利用されたことが記されています。長さ18m・幅2mほどの渡し舟が一艘あり、石田橋50m下流の大きな柳が船着き場になっていたようです。明治40年代、道路が整備され木製の橋が架かると石田の渡し場も廃止されました。



ひとやすみ



渡し場跡で往時を偲ぶ
現在、石田の渡し場跡がある日野川の河川敷には、青い芝生が植えられ整備が進んでいます。渡し舟が行き来し、旅人の足となっていた見晴らしのいい渡し場跡を眺め、往時を偲びましょう。



近松との縁



近松と幸若舞を繋いだ石田の渡し

近松作品に大きな影響を与えたとされている「幸若舞」は、越前朝日町を発祥の地とし、能や歌舞伎の原型と言われています。近松は、この「幸若舞」を見るため石田の渡しを利用したのでしょうか。現在の石田橋の欄干は、当時をイメージした渡し舟がモチーフになっています。



ここに
スタンプを
おしてね!

石田町
近松の里めぐりBOXに
スタンプが
入っています。



子どもの頃を思い出す
クローバーの花嫁。



クローバー(シロツメクサ)

花言葉:約束、恥を思い出してください

恋話

KOI BANA

アイヌの青年が恋人に逢いにくためにのった舟が沈みました。恋人は彼の亡骸を体に結び、沼に身を投げました。翌朝、その周りはクローバーが咲き乱れたそうです。

※メッセージ「約束をおろそかにすると、気持ちはずれ違います」



難関突破! 遠回りしてこそ得られるものがあるはず

map ナンバー

5

吉江七曲り通り

よしえななまがりどおり



正保2年(1645年)から29年間、松平昌親公を藩主とする吉江藩がありました。七曲りは吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、七曲りの名の通り何度も屈曲させ大回りさせるという城下町特有の道路構造をしています。当時は、入口には木戸、境に高札場があったと言われています。現在は当時の佇まいを見る事は出来ませんが、変わらない地割りや道路から吉江藩当時の様子を伺い知ることが出来ます。



ひとやすみ



古い町並みと桜の木

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、七曲り通り。一年を通して賑わっていますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



近松との縁



近松が暮らした城下町

10年余りをこの城下町で暮らした近松。この界隈に足を踏み入れると、幻想的な雰囲気、文化的景観と古民家のすばらしさを堪能できます。当時の力平型の通りが現存し、町屋、商家などが住跡を思い起こさせてくれます。




ここに
スタンプを
おしめてね!

この
伝統的景観の中心部に
スタンプが
入っています。



19年09月14日の足跡を刻む
通関の犬塚。



サクラ

恋話

KOH BANNA

花言葉: 純潔、優れた美人

『あしひきの 山桜花 一目だに 君と見れば 我れ恋ひめやも//大伴家持
山に咲く桜の花をあなたと一緒に眺められたなら、こんな風に花が恋しいと
は思わないでしょう...病の床から恋人を思い詠んだ歌です。』

※メッセージ「心が通じていても、言葉で伝えることも大事です」



悪夢を良い夢に替えてくれるという歴史ある古いお寺

map ナンバー

6 福正寺 ふくしょうじ



吉江藩関係の史跡が数多く残される吉江町周辺。こちらの福正寺もそのひとつで、創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定められました。この時、松平昌親公より多くの材木を寄進されています。長い歴史と人々の祈りに培われた不思議な力が感じられます。



ここに
スタンプを
おしてね!
その
番札の裏側く/BOXに
スタンプが
入っています。



ピンクと白の千日紅
まよい花がゆらゆら。



見どころ



本堂正面軒下に 不思議な雲獣

こちらの木鼻に彫刻されているのは「雲獣」。雲獣は、悪夢を食べてくれたり、悪夢を良い夢に替えてくれたりするそうです。



近松との縁



近松が遊んだ 歴史ある古いお寺

近松が、吉江藩士となった父と一緒に移り住んだのは福松君(松平昌親公の幼名)が元服した明暦元年。このとき近松は2歳。このお寺の境内で遊ぶ近松を思い浮かべることができます。



スズラン

恋話
KOI BANANA

花言葉「幸福、繊細、幸福が戻ってくる、純潔」

春の女神オスタラが、この花の守護神。パリの風習では5月1日にこの花を贈ると幸福が訪れるという、恋人に捧げる花です。

※メッセージ「終わることは、はじまること。一步踏み出しましょう」



「学問の神様」菅原道真と乙千代丸を祀る親子愛パワー

map ナンバー

7

西番天満神社

にしぼんでまんじんじや



ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により御神像は焼失し、作り直されました。菅原道真公を祭神とする西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもあり、村人の信仰を集めてきました。後年60歳を越えた近松は、菅原道真の大宰府への配流を題材にした「天神記」という傑作浄瑠璃を書き上げます。



見どころ



乙千代丸神社

乙千代丸は、菅原道真公の第3子。父菅原道真が大宰府へ配流になったとき、京都を逃われ、家臣とともに立待地区の杉本の地に辿り着きました。乙千代丸は、神像を削り、父の道真として朝夕拝しました。その像を収めた天宮岩の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



近松との縁



国性爺合戦の絵馬

近松の代表作のひとつ「国性爺合戦」は時代物の中でもっとも有名な作品。その絵馬が奉納されています。このあたりで一冊大きな絵馬として知られています。



ここに
スタンプを
取ってね！
そのお世評の書物で「
物語DX」に
スタンプが
入っています。



ウメ 恋話

花言葉：高潔な心、潔白、愛んだ心、幸福

「春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜寐(よい)も寝なくも」/管城守極氏安麻呂 梅は「君」のこと。恋する人を思うと夜も寝られない...寝れない夜の恋心を詠んでいます。

※メッセージ「強がらずに、会いたい気持ちを素直に表現してみてください」



リーダーシップを発揮した松平昌親公を学び能力アップ

map ナンバー

8

吉江藩館跡

よしえはんやかたあと



吉江藩が成立した正保2年(1645)、吉江藩主・松平昌親公は陣屋や町並みを整備。従来の町に新しく整備した町をあわせて「十一口」、これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親は、この頃から政治家としての手腕をふるい、土地を開墾し新しい農地を開拓したり、鍛冶屋や木綿の織物職人の育成など、商工業に力を注ぎます。結果、吉江は丹生郡の政治経済の中心として隆盛を極め、「小江戸」と呼ばれるほどでした。延宝2年、兄の福井藩主・光通が死去し昌親が福井藩主となるまで、わずか30年足らずでした。



松平昌親公 瑞雲寺蔵

正保2年(1645)、結城秀康の子で第3代福井藩主・松平忠昌が死去。その後を子の松平光通が継ぐ。その時、松平光通は、弟の松平昌親公に2万5千石を分与するが、越前国内各所に分散していたため、まず本拠地の運営を行わねばならなかった。慶安1年(1648)、松平昌親公は母所を吉江に設置することを許可され、吉江藩が成立しました。



近松との縁

近松の父が仕えた吉江藩

立待郷吉江の町が生まれた正保2年、昌親公はまだ6歳でした。その時、養育係となった付き人の中に近松の父である杉森信義の名があります。昌親公が元服したときに、杉森信義も2歳の近松とともに吉江に入ります。



ここに
スタンプを
おしえてね！
※この近松の墓前で1
軒建BOXに
スタンプが
入っています。



ナデシコ 花言葉：純愛、恋慕

恋話

KOI BANA

「ひさかたの雨は降りしくなでしこが いや初花に 恋しき我が背！/大伴家持
雨が降り続いても、咲きたてのなでしこのように恋しく思われるあなた…慕
る恋心を隠んでいます。

※メッセージ「毎日が楽しくなるような、何かに恋してませんか」

「東洋のシェイクスピア」と称される近松を学んで諸芸上達祈願

map ナンバー

9

近松門左衛門坐像

ちかもんくんざいもんざそう

(近松情報案内所)



鯖江市には、歴史・伝統・文化を感じるすばらしい地域の宝があります。その中でも全国に誇れるブランド力の高い宝として、江戸時代の文豪(浄瑠璃・歌舞伎作者)近松門左衛門の存在があります。2歳から10年あまりの多感な少年時代を吉江で過ごした近松。その土壌は、越前鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどっしりと鎮座しています。

近松門左衛門の坐像が、ここに設置されています。

ここに
スタンプを
おしてね!



うつくしき和紙な香雪の花が
ついに咲いていました。



ひとやすみ



近松情報案内所

近松関連の情報や案内チラシがたっぷり。「近松の里 たちまちめぐり」の情報拠点となる案内所です。無料レンタサイクルも完備しています。

ちかもんくん号に乗って
散策しよう!



無料レンタサイクル

「近松の里」を散策するのに、無料レンタサイクルをご利用ください。

連絡先: 現地にてご確認ください



ユリ 恋話

KOI BANANA

花言葉: 純潔、誠実、無垢

「さ百合花 ゆりも逢はむと 下庭(は)ふる 心しなくは 今日も経てもよ/大伴家持 百合は「あとで」と重なる言葉、後で逢えると思わないと、今を過ごせない気持ちを表します。

※メッセージ「深呼吸、どちらも大事なら自分のペースを大切に」



信じる人に幸運を招く「三度栗」の不思議な話

map ナンバー

10

大谷公園

おおたにこうえん

(実のなる公園)



大谷公園には、親鸞上人の「三度栗縁起」という伝説に由来する3本の栗の木があります。越後に向かう親鸞が、民家で説法をしました。しかし、誰も話を信じなかったため、焼き栗を庭に植え「この実が年に3度実を結んだならば、私の説法に嘘はない」と言い立ち去ります。後に、栗は1年に3度実を成し、「三度栗」と呼ばれました。3本の栗の木は、その子木を移植したもので、「実がなる」「実る」となり、心願成就のご利益があるとされています。



ここに
スタンプを
おしてね!

この
近松の聖徳寺IBOXに
スタンプが
入っています。



今が掛けがらう懸へと...
お理想的な写真に出会えます。



ひとやすみ



実のなる公園

グミ、栗、柿、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通し「育て、収穫し、食する」といった体験学習型公園を目指しています。起伏に富む地形を活かした楽しい空間で、子供たちも自由に遊べます。



近松との縁



近松が愛した 立待の風景を眺める

左右の竹林を仰ぎ見ながら石段を登りつめると、見晴らしの良いのどかな立待の町の景色が広がります。うぐいすを始め、いるいな野鳥の声を楽しみながら、近松が愛した城下町に思いを馳せましょう。



リンドウ

恋話

KOI BANANA

花言葉:正義、恋している時のあなたが好き、さびしい愛情

平安時代、おしゃれな花とされ、女御たちの衣裳の模様に使われました。リンドウが1本で咲く姿から「恋しているあなたを愛する」というやさしい花言葉ができました。

※メッセージ「落ち込んだときは、ひとりの時間が必要です」



まっすぐ伸びる大杉にあやかって成長を祈願

map ナンバー

11

春慶寺

しゅんけいじ



寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあった草庵に名づけた「心敬寺」にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に一千坊がひしめいていましたが、織田信長の越前侵攻の焼き討ちに遭い現在の寺院だけが残りました。正保2年(1645)吉江藩成立後、藩主・松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を天台宗「春日山 春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。泰澄大師伝記には、大師が三十八社より越知山へ通う途中、一草庵であった当寺において香や菓を供えて選擇したとあります。寺の西側には、徳川家家紋の原型になった「二葉葵」が植えられています。



ここに
スタンプを
おしてね！
その
お礼の景観で「おX」に
スタンプが
入っています。



大きな梅の実は、毎年見事な花を咲かせます。



見どころ



本堂脇に鯖江市指定文化財 推定樹齢400余年の御神木(大杉)の、まっすぐ伸びたその姿に「子どもがすくすくとまっすぐ育ちますように」と祈願する人も少なくありません。その傍らに、室町時代から近代にかけて造立された117基の石造物が遺存されています。これほど多く遺存しているのは、市内でも稀であり貴重だそうです。



近松との縁



幻想的な椿に何を思う…
境内に群生する椿、散りゆく花が辺りを深紅に染めるその様は幻想的で美しい。幼少の頃、この寺の一角を借り住んでいたといわれる近松は、どんな思いでこの花を愛でたのでしょうか。



ツバキ

恋話

KAN BANA

花言葉 完全な愛、完璧な魅力、理想の恋

「あしひきの八重の椿つらつらに見とも飽かぬや 福点でける君」大伴家持見飽きることがあるでしょうか、この椿を植えたあなたを…椿は古事記にも登場する、神聖な樹木です。

※メッセージ「鏡の中の自分、見つめてみて」



近松の産湯伝説のある、千古の昔より湧き出る健康長寿の水

map ナンバー

12

榎お清水

えのきおしょうず



春慶寺本堂横の竹林の中の小径をほんの少し下って行くと、お泉水「榎お清水」のある山麓に出ます。ここは、千古の昔より湧き出ており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様の手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。近松の時代、吉江藩主・松平昌親公は「榎お清水」を笏谷石で3つに仕切り、水飲み場と洗濯場を整備して村人の憩いの場とし、さらに吉江の城下町に水を引き入れるため木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のバチの形をしています。



ひとやすみ



お不動様が見守るお清水
近松の時代から、廻れることなく今なお水を蒸えています。カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が豊富で、濃度の炭酸ガスを含んでいるまるやかで清涼感のある水は、平成22年「ふくいのおいしい水」に認定されました。市指定文化財にも指定されています。



近松との縁




近松少年が親しんだ水辺
お清水付近は「池泉広場」として整備されています。その裏の庭から時折、お清水が湧き出る様は、見ているだけで心落ち癒させてくれます。また、近くには蓮池や中置池があり、近松少年が親しんだ水辺の自然環境を再現しています。近松作品には、蓮の花が多く出てきます。この辺りで遊んだ当時を思い出して作品を描いたのでしょうか。



ここに
スタンプを
おしえてね！
その近松の里で
物語BOXに
スタンプが
入っています。





ハス

恋話

KOI BANANA

花言葉 愛が叶った恋、運命、仲直

中国の伝説。夏の深夜、月の仙女は下界の川面を鏡に化粧をしていた。その美しさに見惚れていた川の主の心に惹きつけられ、葉の象徴とされるかんざしをうっかり落としてしまう。川の主は急いで水面に浮上るが、川面には蓮の花が一面に咲き乱れ、持っていたかんざしも蓮の花びらに変わっていた。川の主は唇を返すことができます。恋は実らなかった。

***メッセージ「結果を求めすぎないで、まずは冷静に」**

江戸時代を代表する文豪

近松門左衛門

ちかまつもんざえもん

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門(1653～1724)は、多感な少年時代、人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしています。義理人情に悩む日本人の人間らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや悪かさ、やさしさを描いたその作品は360年を経た現在も愛され続けています。



近松門左衛門作徳田之妻
(18) 林葉文庫蔵

鯖江市では「豊かな自然につつまれる魅力と、
人と歴史が見える「近松の里」づくりをテーマに、
住民と行政が一体となって、まちづくりを進めています。



「ちかもんくん」は、鯖江で少年時代を過ごした文豪近松門左衛門により観しめ、また近松文学に対する理解を深め、それをもとに「歴史を活かしたまちづくり」や「近松の情にふれあうまち鯖江」を広く内外にPRするための公募により決定。近松門左衛門の少年期をイメージして平成10年に誕生しました。



近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20 Tel.0778-53-2257

立待公民館 「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 Tel.0778-51-3376

近松会館 「近松情報案内所」

〒916-0024 福井県鯖江市吉江町15-77-7 ※無料レンタサイクルあります。

www.city.sabae.fukui.jp/index.html (鯖江市ホームページ)

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内) Tel.0778-51-3376

■さばえ近松文学賞2018〜恋話 (KOIBANA)〜 ■

平成30年11月2日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版】

発行社 [DoCompany出版\(ボボブックス\) BoboBooks](http://bobobooks.com)

東京都港区南青山2-2-15 ウイン青山14階

TEL 050-3692-4434 FAX 03-6369-4449

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233 FAX 0776-28-5234

<http://bobobooks.com>